

I 自然に触れる楽しみ

1 アメンボがとんだ！

1年生担任の吉永洋子先生が教室から帰ってきた。

Y「校長先生、アメンボって、とぶんですか」

T「さあ、とんでいるのは見たことがないね。でも、『とぶ』ってどういうふうに？」

Y「どういうふうに、とは？」

T「とぶにもいろいろあるでしょう。『飛ぶ』『跳ぶ』『翔ぶ』それぞれに違うでしょう」

Y「Mさんが日記にこんなふうを書いてきたのです」

と見せてくれたノートには、ていねいな絵と次のようなしっかりした文が書いてあった。

きょうの30分休みに、6年生のおにいちゃんたちが、ついていた池を見ていたら、あめんぼがおよいできました。だから、つかまえようとおもったら、できごとがおこりました。

そのできごとというのは、あめんぼがとんでいったことです。

わたしは、

「うそだ」

といいました。あめんぼがとぶことは、ともだちもしりませんでした。いいもの見つけたなとおもいました。

大はっ見をしたから、とってもうれしかったです。

私は、彼女の大発見を世界大百科事典のアメンボの項で確かめた。そこには、羽のあるものもないものもいると書かれていたが、海に住むものや特別なものを除いては「とぶ」と言ってよいようであった。

これは私の知らないことであった。アメンボがとんでいる姿を見たことがなかったのである。

遊びの中でアメンボを見つめ、こんな発見をした児童に教えられた。毎日の学習の中や、自然に触れる体験の中で、こんな発見をしているのである。

私たちは、こんな児童生徒を育てていくために、進んで、自然と触れあう生活・触れさせる生活を心がけたいものである。そして、学級朝の会などでは、子どもたちが登校の途上で見聞きしてきたことを聞き取ってやりたい。これは、子どもたちと自然との触れあいをサポートする仕事なのである。

「今朝、田んぼのところを通ったら、葉っぱの先に水玉が付いていた。太陽の光でピカピカ光って、とってもきれいだったよ」

「生駒山の上に白いお月さんが光っていたよ。朝でもお月さんが出てるんだね」

「アリさんが行列していたよ。向こうから来たのとあっちへ行くのものが、お話していたよ」

こんな話に耳を傾け、しっかりと聞き取り、教師の体験なども披瀝していく中で、子どもたちの目が自然に向けられていくのである。

教科担任制の中学校では、学級担任が理科の担任とは限らない。しかし、「校門のところの梅が満開になった。去年、満開になったのは卒業式だったから、少し早いね」とか「耐寒駆け足が始まった昨日から西高東低の典型的な冬型の気圧配置になった。風邪をひかないように汗の処理をきちんとしておきなさい」など、季節の移り変わりにかかわる話題にことかかないのは同じことである。朝の学級活動の時間に担任に与えられる貴重な時間を、ただ事務的な連絡にとどめるのはもったいないと思う。

自然ばなれは、子どもたちだけではない。というよりは、大人たち、すなわち私たち自身に一層顕著であるように思われる。時間にせかされ、バスや電車を乗り継いで学校に急ぐ生活であれば、やむを得ないことかも知れない。しかし、停留所までのひととき、バスを待つひととき、こんな時間を自然に目を向けてみたいものである。そして、日日変化する自然から、季節の移り変わりを感じとり、自らの発見を子どもに語りたい。

月	1年・自然の観察	4年・初等科理科
4	1 学校の庭	1 イモの植エツケ
	2 記念の木	2 兎ノセワ
	3 庭の花	3 テフト青虫
	4 庭の動物	
5	5 春の野	4 モミマキ
	6 春の種まき	5 田の土・畠の土
	7 木の葉遊び	6 田ヤ畠ノ虫
	8 草花とり	7 小川のカイ
6	9 草花植え	8 田植
	10 池や小川の動物	9 森ノ中
	11 麦畠と虫とり	10 クモ
7	12 雨あがり	11 イモホリ
	13 しゃぼん玉遊び	12 デンワ遊び
9	14 あさがほ	13 稲田
	15 ばったとり	14 紙ダマ鉄砲
	16 お月さま	
	17 うさぎ	
10	18 野菜と果物	15 鳴ク虫
	19 秋の種まき	16 イモホリ
	20 とり入れ	ト種マキ
11	21 もみぢ	17 トリ入レ
	22 笛	18 デンブン取り
12	23 鳥の羽	
	24 落葉かき	19 ウガヒ水
	25 冬の衛生	20 渡り鳥
1	26 冬の天気	21 オキアガコボシ
	27 日なたと日かげ	22 生き物ノ冬越シ
2	28 春を待つ庭	23 コンロト
	29 方角	湯ワカシ
3	30 草つみ	24 春ノ天気

— 国民学校初等科理科教材配列表 —

2 キュウリを育てる

小学校低学年における自然との触れあいの重要性が説かれるようになったのは、相当古いことのようにである。昭和17年4月、私は奈良市の佐保国民学校に入学した。これは現在の小学校にあたるもので、昭和16年に施行された「国民学校令」によって設けられ、昭和22年の教育基本法、学校教育法等の施行に伴って廃止されたものである。ここで学ぶ教科の中には、現行の理科にあたるものとして、「自然の観察」があった。しかし、年齢が6歳というときであり、この教科に教科書がなかったことなどから、どんなことを学んだのかということについては覚えがない。

ただ、同じクラスだった福島儀重君のキュウリの観察記録の発表を聞いた覚えがある。これが「自然の観察」の学習に基づくものであったようである。彼は、家の畑にキュウリの苗を植え、水をやり、肥料をやって、咲いた黄色い花を観察している。彼の記録は、「採れたキュウリを、漬物にして食べました。ハリハリと音がしました」という記述で終わっていた。「とてもおいしかったです」といった決まり文句でなく、新鮮な野菜の様子を音で表現しているところに魅力を感じたのであろう。今も、印象が鮮やかである。

では、この「自然の観察」をふくむ「国民学校の理科」はどんな教科だったのだろうか。学級担任の大富登先生に教わった最初の理科について少し述べておくことも参考になるかも知れない。

この国民学校初等科の学習内容を規定していたのは、「国民学校令施行規則」であり、その第9条には、理数科理科について次のような記載がある。

理数科理科ハ、自然界ノ事物現象及ビ自然ノ理法ト其ノ応用ニ
関シ、国民生活ニ須要ナル普通ノ知識技能ヲ得シメ、科学的処理
ノ方法ヲ会得セシメ、科学的精神ヲ涵養スルモノトス。

初等科ニ於テハ、児童ノ環境ニ於ケル自然ノ観察ヨリ始め、日
常普通ノ自然物・自然現象・其ノ相互並ニ人生トノ関係・人体生
理及ビ自然ノ理法ト其ノ応用ニ関スル事項ヲ授クベシ。

また、この条文の中には、「自然ニ親シミ自然ヨリ直接ニ学ブノ態
度ヲ養フベシ」とか「植物ノ栽培・動物ノ飼育ヲ為サシメ生物愛育ノ
念ニ培ウト共ニ、継続的ノ観察実験ニ依リテ持久的ニ研究スルノ態度
ヲ養フベシ」などといった記載があり、「国運ノ発展」とか「国家ノ
興隆」、「皇国ノ使命」や、国民学校令第1条の「皇国ノ道ニ則リテ初
等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的練成ヲ為スヲ以テ目的トス」の規定に
基づく制約の中にあっても、自然に親しみ科学的・合理的な精神を育
てることを目指すなど、現在の理科に近い考え方も見られるように思
う。

この教科の特徴の1つは、教師用の指導書だけが作られ、児童用教
科書が作られなかったことである。これは、既成の自然科学とその成
果を教えることより、子どもの豊かな情操を培い、自然の事物や現象
を正しく見たり考えたり、扱ったりする能力を育てていく教科であり
たいという期待の現れではなかつただろうか。

ところで、平成4年からは小学校に新しい教科・生活科が誕生した。
私は、奈良県小学校教科等研究会生活科部会（奈良県小学校生活科教
育研究会）を設置する仕事を進めながら、「生活科に教科書が必要な
のだろうか」と考えた。それぞれの地域に生き、その自然や社会、そ
こに住む人々とかかわる活動を主体とするこの教科では、いわゆる教

科書は不要ではないかというのが私の思いであった。

ご承知のように、結局は他の教科と同じように生活科の教科書が作られたが、このことは功罪は相半ばするように思う。

もし、生活科の教科書が作られなかったならば、戦後初めてという新教科の誕生はなかなか受け入れられず、有名無実なものになり定着しなかったかも知れない。そのおそれは多分にある。しかし、もっともっと創意工夫に満ちた生活科になっていたかも知れない、そんな気がするのである。

3 季節の行事を楽しむ

私たちは自然の移り変わりと共に生きてきた。それは、生物の種の1つであるヒトとして当然のことである。自然と離れては生きていけない私たちの1年 365日の暮らしの中には、自然とかかわり、季節感にあふれる行事がある。しかし、最近、このような行事が家庭から遠ざかっているような気がしてならない。家庭におけるこうした行事の復活は、子どもたちの目を自然に向けるものとして重要なものである。

例えば、七夕である。旧暦で行われていたところと違って、新暦で行うとなると1学期末の学校行事として適当なものであったのか、多くの小学校で行われているようである。

私も小学生のころ、国語の時間に短冊を書き、圖畫や工作（現在の図画工作）の時間にはスイカやキュウリなどの絵を描き、これを切り抜いてつり下げた。これを飾った講堂に全校児童が集まって、星の話を聞いたり、音楽の時間に練習した「たなばた」の歌を歌ったり、合奏したりした覚えがある。今も同様であろう。

このこと自体は、まことに結構なことである。しかし、
「きょうは七夕だから…」

と、家族そろって外に出て、星を眺めながら語り合うという光景が見られなくなってしまった。貴重な家庭行事を学校が取り上げてしまったような気がする。

七夕が学校行事として行われていても、家庭でも取り組んでほしい行事である。そんな思いから、学校だよりで家庭にも呼びかけた。次にあげたのは平成7年7月3日付けの学校だより「すくすく」である。

※ この学校だよりは、校長として勤務した8年間に、教育についての思いや子どもたちと教師の取り組みの素晴らしさを伝えたいと考えて作成し、家庭や地域に配付したものである。これは、生駒台小学校の「でんしょぼと」と生駒小学校の「すくすく」を合わせると389号で、授業日数を発行した号数で割ると、5日に1回以上の割合で発行したことになる。

.....

七夕や端午の節句やひな祭りなどの季節感あふれる家庭行事がしだいに消えていくように思います。その理由は、いくつか考えられますが、こうした行事が学校や子ども会で行われるものになってしまっていることもあげられるのではないのでしょうか。「家での団欒はテレビで」ではなく、子どもたちを主役に、こんな行事を復活させたいと思います。そんな中に、家庭の復権があるのではないのでしょうか。

子どもころ、七夕祭りは楽しい行事でした。近所でもらってきた竹に、願いごとを書いた短冊や色紙で作った輪をつないだもの、半紙を折って切り込みを入れた飾り、スイカの絵などをぶら下げました。ぶら下げるのに使ったのは、「こより」でした。「こより」をご存知でしょうか。漢字では「紙繕り」と書きます。和紙を細く切り指先で繕(よ)って作った細い紐と言えいいでしょう。

ちょっと余談になりますが、昭和22年に新制度の小学校・中学校

ができ、戦後の新しい教育が始まりました。そのとき、6年生だった私に担任の先生が新設された家庭科の時間に教えてくださったのが、こより作りでした。まだ、教科書もないという時代です。新しい教科で何を教えたらいいかと、お考えになった後の結論が「こより作り」だったのでしょう。おかげで、今でも作れます。そして、ホッチキスがまだ一般的なものではなかった昭和33年に勤めた最初の学校では、書類を綴じるのに使いました。

さて、本論に戻ります。七夕の夜はふだんとは違った日でした。

「夜になったら家に入りなさい」と言われず、外で遊ぶことが許されました。町の中のことでですから、真っ暗な空ではありませんでしたが、今とは大違いでたくさんの星が見えました。ときたま、流れ星が光りました。消えるまでに願いごとをするとかなえられるんだと聞いて一生懸命にお祈りをしたものでした。

あれから50年あまり、2人の子どもたちが巣立って行き、家の庭から七夕が消えました。さびしい感じがします。そこで、今年の七夕には、久しぶりに短冊を書き、笹に飾りつけることにしました。平成7年7月7日の七夕です。ラッキーセブンの「7」が3つ並ぶ日です。この日付の駅の入場券も売り出されたそうです。また、この日に誕生日を迎えられ、77歳の喜寿の祝いをされる方のお生まれになった日は、大正7年7月7日だと聞きました。「重ね重ねおめでとう」と申し上げたいと思います。

.....

最近の季節感のない生活の中での「七草がゆ」などの行事は、四季の移り変わりの中に暮らしていることを実感させてくれる。正月には、甘辛く濃い味のもの食べるためか、このころに食べるさっぱりしたものは、おいしい。「七草がゆ」で春を味わうことは昔の人の素晴ら

しい智恵である。

最近、7種がセットされたものも市販されているが、7種も入っていないだけでもよい。せいぜい、道端で採ってきたセリやナズナにダイコン、ありあわせの野菜を入れる程度でよい。しかし、こうした機会に道端の自然を見つめ直してみたいものである。そして、毎日の忙しい生活の中で、ともすれば忘れがちな季節感を大切にしたいと思う。生活の場から自然が見られなくなってきたところも多いと思うが、親子で春の七草探しに挑戦してみるならば、新しい発見があったり、親子の対話が生まれてきたりするのではないか。このような、気楽に自然とかかわり合う生活が、

「お父さん、この葉っぱとこの葉っぱはよく似ているね」

と気づき、

「あっ、ふしぎだな。これはどうなっているの？」

などといった課題を見つける子どもに育てていくのである。